

---

# 葛蒲

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

菖蒲

### 【Nコード】

N1591D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

中国春秋時代。王を殺すよう頼まれた漁師専緒は刺客となり死地に赴く。彼が愛した菖蒲の花と共に。司馬遷史記刺客列伝のお話です。男の生き様です。

## 第一章

菖蒲

昔の話だ。中国楚の国に伍子胥という男がいた。愚かな王を諫めたせいで父と兄を殺され自身は呉の国に逃れそこに仕官した。能力はあるが非常に執念深い男であった。

「何としてもあの王をこの手で」

常にそう願っていた。父と兄の仇を忘れたことはない。彼が呉に仕えたのは全て私怨によるものであった。しかし能力はあったので彼が主とした公子光にはよく用いられた。

この光という男も癖があった。王族であり前々の王の息子であった。しかし様々な事情で今は臣下だった。野心家であり王となることを心の中では望んでいた。

伍子胥はこれを知っていた。だからこそ彼に仕えているのだ。光も彼のことは知っていた。言うならば互いに利用し合う仲であったがそれでもその関係は上手くいっていた。それは互いの心も力も知っていたからだ。

光は王になりたかった。それでしきりに伍子胥に相談する。その時は常に言うのであった。

「それには人が必要です」

「人か」

「その通り」

その険しい顔を密室の中で見せる。部屋は枯れ木を燃やした灯りで微かに照らされているだけである。その中で二人だけで話をしていったのだ。他には誰もいない。

「王を殺せる者が」

「刺客なのだな」

「その通りです」

菖蒲

光の言葉にこくりと頷く。険しい顔は元々の表情である。その顔

こそが彼が今までどうした人生を歩んできたかがわかるものであった。無念と復讐に満ちた人生を。

その顔で言葉を続ける。

「我が君は王にならなりたいのですな。呉の王に」

「それはわかっていると思うが」

光は鋭い目で答える。鼻は高く目は切れ長だ。何処か異相であり野心をそこに感じる。そうしたものを見れば彼がただの人物ではないのがすぐにわかる。何故かその顔は伍子胥に非常によく似ていた。そっくりではないが少し見ただけでは実によく似ていた。

「そしてその暁には」

「わかつております」

伍子胥は重苦しい声で主に答えた。

「楚を」

「あの王のことは御主に任せる」

光は素っ気無く述べた。

「平王はな」

「御願いします」

「どのようなにしても構わぬ」

この場合はどうやって殺してもよいということであった。当然ながら伍子胥の心は知っている。本当にどんな処刑をしても不思議ではない。だが彼にとってそんなことはどうでもよかった。彼は王位になりたかった。そしてその見返りであったからだ。

「それは保障するぞ」

「御願いします。さすれば」

「刺客を探して参れ」

「わかりました。それでは」

二人でこんな話を続けていた。伍子胥は他にも人材を求めあちこちを歩いていた。そうして孫武という兵法家を手に入れた。だが刺客は中々見つかりはしなかった。そのことに内心焦ってさえた。だがある日のこと。屋敷で武芸に励む彼のところに部下が来た。

そして告げるのだった。

「それはまことか」

「はい」

部下は彼の前に片膝を付き述べるのだった。

「この目でしかと見ました」

「ふむ」

伍子胥は剣を振るう手を止めていた。そのうえで考え込んでいた。

「今はそうだとは言えぬな」

「ではどうされますか？」

「今そこにおるのだな」

そう部下に問うた。

「そこに」

「生業がそこにありますから」

部下はそう答えた。

「そこから離れることはできないようですから」

「わかった」

伍子胥はそこまで聞くと表情を変えずに頷いた。だがその鋭い目の光がさらに鋭くなった。それはさながら獲物を狙う猛禽のそれであつた。

「では今から行こう」

「今からですか」

「時は待つてはくれぬ」

伍子胥は冷徹な声で述べた。

「だからだ。よいな」

「わかりました。ではすぐに馬車を」

「うむ」

彼はすぐに屋敷を出た。そうして部下が報告したある場所に向かった。そこは川辺であつた。

広い川だ。呉は南方にあり川が多い。その為水軍が発達もしている。

その川辺は青く澄んでいた。ただひたすら美しかった。青い水面に銀の光が跳ね返りそれが伍子胥の目にも入っていた。だが彼はその美しさには目を奪われてはいなかった。

「ここにおるのだな」

馬車から降りて川辺を見ていた。そのうえで後ろに控える部下に問うた。

「この辺りに」

「そうです」

忠実な部下はまた答えた。

「ここで漁師をしております」

「漁師か」

それを聞いてまた辺りを見回す。見れば小舟で出ている漁師が何人もいた。

「結構おるな」

「そうですね。その中で」

「むっ!？」

ここで伍子胥はあることに気付いた。

「あれは」

漁師の中の一人に奇妙な者を見つけたのだ。それがまず目に入っ

た。  
「変わった漁をしているな」

最初はそう思った。何とその漁師は網で魚を捕っていたのではないのだ。

## 第二章

何と小石や小刀を投げてそれで魚を捕っていた。上からそういったものを投げて魚を撃つて浮かび上がったところを捕らえていたのだ。見事な腕前であった。

「ああした漁の仕方は見たことがないぞ」

「あの者です」

部下はここで伍子胥に言うのであった。

「あの者こそが」

「あの者が」

「はい」

部下はまた答える。

「その見事な腕前の者です」

「確かに」

伍子胥はその者を見ながら答えた。見れば彼は不安定な小舟を一人で操りそうしながら水面近くの魚を次々に撃つて捕らえていたのだ。それを外すこともなく。

「あの者の名は」

今度は名を部下に問うた。

「何というのだ？」

「専緒といいます」

部下はその漁師の名を告げた。

「それが彼の名です」

「そうか、専緒というのか」

伍子胥はあらためて彼の名を口にしてみた。言葉に出してみると不思議と心強さが感じられる名前であった。それが彼も不思議であった。

「よい名だな」

「はい。この辺りでは一番の漁師だそうです」

それを聞いてさもありませんと思った。そしてそれだけではないのもわかった。

「ふむ。会ってみたいな」

「彼にですか」

「うむ。若しかしたら」

若しかしたらと言ったがそこにあるのは確信であった。

「あの者ならば。ことを果たせるな」

「それでは殿」

「うむ」

また部下の言葉に頷く。

「我が君にもお伝えしよう。よいな」

「はっ」

こうして専緒は光と伍子胥の二人の知るところとなった。光は彼の名とその漁の仕方を聞くとまずは唸った。それから伍子胥に対して述べるのであった。

「その者ならばもしや」

「我が君もそう考えられますか」

「御主と同じことをな」

こう告げた。服の中で腕を組みながら。

「必ずや果たせるとは思わぬか」

「確かに」

伍子胥はあらためて主に対して頷く。

「刺客としたならば。確実に」

「ことを果たしてくるな。ではわしも会おう」

「我が君がですか」

これは伍子胥にとっては思わない言葉であった。彼が会って話しようと思っていたからこれは当然であった。当然でなかったのは主の言葉であったのだ。

「そうじゃ。何かおかしいか？」

「いえ」

その言葉は否定する。だがそれでも言う。

「まさか。御自ら御会いになられるとは」

「当然のことだ」

その険しい顔に微かな笑みを含めさせての言葉だった。

「大事を果たしてくれるのは士だ」

「はい」

その通りだ。これは伍子胥もわかることだった。それは何故か。

彼もまた己を士と自認しているからだ。その誇りも心の中に持っている。

「士を尊ばずして何を尊ぶ。そういうことだ」

「それではすぐにでも」

「そうだ。馬車を用意せよ」

光は迷わずに伍子胥に告げた。

「士に会いに行くぞ。宝と共にな」

「はっ」

こうして光は専緒に会うことになった。無論伍子胥も同行している。二人が辿り着いたのは一件の静かな家であった。到底屋敷と言えるものではなかった。

「ここなのか」

「はい」

伍子胥の部下が光に答える。先導は彼が務めていた。

「この家でございます」

「みすばらしい家だな」

「士は住んでいる家で決まるものではありません」

伍子胥が主に顔を向けて述べた。

「心で決まるものです」

「そうだったな。では心を見たい」

「そうですね。しかし」

「おや」

ふと彼等の後ろから声がした。

「見たところ高貴な方々のようですがどうしてこちらに」

「おおっ」

「専緒殿か」

二人は笑顔で声のした方を見た。するとそこに一人の粗末な身なりをした男がいた。

ごく有り触れた漁師の格好をしている。顔も身体も引き締まっただけで精悍な印象を受ける。黒い目には強く鋭い光がありそれを見ただけで彼が只者ではないことがわかる。鼻が高くそれが彼の顔を立派にみせている。

とりわけ特徴的なのはその手であつた。異様なまでに長く、鍛えられていたのだ。

「何故私の名を」

その男専緒は自分の名を言われたのをいぶかしんでまず二人に問うた。

「御存知なのですか？」

「御名前は常々聞いております」

「それでこちらに参りました」

「はて」

名前を聞いていいると言われてさらにいぶかしむ専緒であつた。

「私の名前をですか」

「そうです」

二人はまだ答える。

「それが何か」

「それは妙なことです」

専緒はそのいぶかしんだ顔でまた述べるのだった。

「私のような者が名を知られているとは。人違いでは？」

「いえ、違います」

伍子胥がそつ彼に申し出た。

「私の名は伍子胥」

「伍子胥」

その名を聞いた瞬間専緒の表情が一変した。警戒がそこに見られた。

「貴方がですか。あの」

「私の名は御存知でしたか」

「はい」

こくりと頷いて答える。見たところ表情には複雑なものがある。

伍子胥という人物の能力と人柄、両方を知っているからこそその顔であるのがわかる。

「御名前は常々御聞きしています」

「それはどうも」

「さすればそちらの方は」

次に伍子胥の隣にいる高貴な服の男に顔を向けた。

### 第三章

「公子様ですか」

「如何にも」

光は専緒の言葉を受けて頭を垂れてきた。彼はそんな光の腰の低い様子を見てその顔をさらに警戒させるものにした。

「私がその光です。どうぞ宜しく」

「公子様がどうしてこちらに」

「何、大したことはありません」

光はにこやかな顔を作って専緒に答えた。

「貴方の様な立派な方と知り合いになりたいと思ひまして」

「まさか」

専緒はその言葉を否定した。

「私のような者と。まさか」

「ですがそのまさかなのです」

光はにこりとした笑みを作ったまままた述べた。

「人はその力を隠せぬものです」

「力を」

「はい。ですから」

また専緒に対して言うのだった。

「どうか。お近づきになって頂けませんか」

「ささやかなものですが」

伍子胥がここで宝を出してきた。

「どうぞ」

「それは一体」

「何、贈りものです」

光がにこやかに専緒に述べる。やはりそのにこやかさも作っていた。  
た。

「私からの。どうぞお受け下さい」

「私のような貧しい者にですか」

「人は貧しさが問題ではありませんぞ」

この言葉は伍子胥からの受け売りであるがあえて使った。

「ですから。どうぞ」

「遠慮なさらずに」

「折角の申し出ですが」

伍子胥からも薦められたがあえて断るのだった。

「お受けするわけにはいきません」

「またどうして」

「私には過ぎたものだからです」

贈り物を断るにはこれ以上はない言葉であった。

「ですから」

「受け取れないと」

「はい」

専緒の言葉は強く堅いものであった。何者をも拒むかのように。

「ですから。申し訳ありませんがここは」

「そこを何とか」

それでも光は渡そうとする。しかし専緒はそれを拒むばかりだ。

話は堂々巡りになるうとしていた。そうして話が膠着していたのを

見て伍子胥が主に言うのだった。

「公子、ここは」

「しかしだ」

「いえ、帰りましょう」

彼もまた強い声で言う。有無を言わさぬ強さがそこにはあった。

「宜しいですね」

「ううむ。その方が言うのならば」

光にとって伍子胥は無二の腹心だ。その彼の強い言葉を無下にで

きる筈もなかった。彼はこの場は仕方なく退くことにしたのであっ

た。

「専緒殿、お邪魔致した」

「いえ」

挨拶は礼に沿って行われた。光は馬車に乗る時に見た。専緒が小さい子供達に囲まれてみると。見ればかなりの子沢山であった。

「子供が多いな」

「そうですね」

伍子胥も馬車に乗っていた。そこで主に答える。

「それもかなり」

「やはり子供が多いのはいいな」

これは光個人の好みだけでなく国力にも影響することだった。やはり人口が多いとそれだけ生産力も兵力も上がる。そういうことなのだ。

「そうした意味で彼は幸福だ」

「子供ですな」

だが伍子胥はそこに別のものを見ていた。

「やはり」

「どうかしたのか？」

「我が君」

あらためて横にいる光に対して言うのだった。

「彼の協力を得るまたとない方法を見出しました」

「何と、ではそれは」

「全ては私にお任せ下さい」

鋭い目に強い光を帯びていた。何かを為す目であった。

「宜しいでしょうか」

「うむ、わかった」

全幅の信頼を置いている伍子胥である。彼としては断る理由はなかった。

「では宜しく頼むぞ」

「はっ」

主の言葉に頷く。伍子胥は暫く経ってその策を実行に移したのであった。

専緒が光の贈り物を拒絶してから数日後。彼が漁から帰ってみると家の様子がおかしかった。何か子供達がやけにはしゃいでいるのだ。

「何かあったのか？」

「美味しい果物を貰ったの」

子供達は口々に彼に答える。

「果物をか？」

「うん、これ」

彼等が父に差し出してきたのはそれこそ貴族しか食べられないような珍しい高価な果物であった。無論専緒もそんなものは食べたことがない。

「これとね」

「まだあるのか」

「これも貰ったの」

今度は娘達が差し出してきた。それは菖蒲であった。青い菖蒲であった。

「花か」

「うん。この前来た方から」

「この前の」

専緒は子供達のその言葉から贈ってきたのが誰なのかすぐにわかった。

「そうか、頂いたのだな」

「頂いて悪かったの？」

「いや」

子供達のその言葉には首を横に振る、その表情を見せずに。

「構わない。それよりも美味しいか？」

「うん」

無邪気に父親に答える。そうしてただひたすら果物を食べ花を愛でていた。

「とても。こんなに美味しいのはじめて」

「そうか、それはよかつたな」

専緒は子供達のそんな言葉を聞いて笑みを浮かべた。だがその笑みは何処か強張り覚悟が感じられるものであった。

「美味しいものを食べられて。その恩を忘れるんじゃないぞ」

「うん、お父さん」

「わかつてるよ」

やはり無邪気に子供達に答える。彼等はわかつていなかった。父の顔に見られる覚悟を。彼は子供達の果物と花を見て既に意を決していたのであった。

それからは彼は光や伍子胥からの贈り物を素直に受け取るようになった。何も語らずに受け取る。それにより彼の家は見る間に裕福になり年老いた母も妻子も笑顔になっていたが彼だけは笑顔にはならなかった。まるでそこに運命があるように。笑いはしなかったのだった。

歳月が経った。呉王は弟達に楚を攻めさせたが忽ちのうちに窮地に陥った。軍が退路を断たれ包囲されたのだ。この上ない危機であった。

## 第四章

王はそれを見て光を総大将に任じて救援の兵を向かわせることにした。その為には彼の屋敷に行くことになったのであった。王自ら出馬を願うというのだ。それ程呉にとって危機ということであったが光にとってはまさに天が与えた千載一遇の好機であった。

「今です」

伍子胥は密室で彼に言う。細い枯れ木を燃やしてその中で話をしていた。

「今こそ王を討ち我が君が呉の主に」

「そうだな」

光もそのつもりであった。暗い一室において力強く頷くのだった。

「今しかないな」

「はい。それではすぐに」

伍子胥はすぐに言うのだった。

「彼を」

「それではだ」

光は自ら動くのだった。彼もまた一人の傑物である。どうするべきかはわかっていた。

「私が行こう」

「御願いできますか」

「私が行かねばどうする」

伍子胥に対して告げた。

「この仕事は。そうではないのか」

「確かに」

伍子胥もそれを否定しない。その通りだからだ。

「では。御願い致します」

「わかった。それではな」

すぐに専緒を自分の屋敷に招くのであった。王が来る前にだ。こ

うして彼は公子の屋敷に招かれた。身分の低い彼にとってはやはり夢のような話であった。彼はそれでも毅然として屋敷に入り広間で光の横に招かれ酒や御馳走を受けた。そこに刃当然ながら伍子胥もいた。正しく言えば彼等三人しかいなかった。異様な宴であった。「ところですな」

不意に光は専緒に言葉を切り出してきた。

「私は。御存知でしょうか。かつての王の息子でありました」

「はい」

専緒もその言葉に頷く。これはもう言うまでもなく呉の者ならば誰でも知っていることであった。

「そうでしたな」

「今の王は私の父の弟の子」

つまりは従兄弟というわけだ。光の父が自分の弟達に王位を譲り末の弟がそれを固辞した為に末弟の子が王となったのである。これが光にとっては不満であったのだ。

「専緒殿に御聞きします」

尋ねる声ではなかった。窺う声になっていた。

「子と弟、どちらが王に相応しいでしょうか」

「それは言うまでもありません」

専緒も答える声ではなかった。剣を握る声だった。

「子です」

「では。おわかりですね」

「はい」

剣が抜かれた。

「王についてはお任せ下さい」

「かたじけない」

光はそれを聞くと姿勢をあらためた。伍子胥もだ。そうして専緒に対して深々と頭を下げるのであった。

「それでは御願います」

「はい。ただ」

「ここで専緒は言うのだった。」

「何か？」

「私はそれで構いません」

「こう前置きしてきた。」

「ですが」

「それは御家族のことですか」

「そうです。妻子と年老いた母が」

そのことを忘れたことはない。実は最初から二人が自分の許を訪れた理由はわかつている。それを断ってきたのは家族がいるからだ。つたのだ。

「おります。彼等のことは」

「それはお任せ下さい」

光は頭を上げて述べてきた。

「私が責任を以って」

「そうですか。それでは」

「それですね」

今度は伍子胥が専緒の前に出て来た。そうして膝をついて三本の剣を出してきた。

「その責を果たす為に剣を」

「この中から選ばれよと」

「左様です」

そう専緒に告げた。

「越の国の名工が鍛え上げたものです」

「その三本の剣が」

「まずはこれです」

最初に伍子胥が差し出したのは青黒い剣であった。その色がやけに不気味であった。

「如何でしょうか」

「まるで蛇のようですな」

「はい。そして次は」

「一番目に出してきた剣には独特の模様があった。それは表面に連なり合った岩石を思わせるものであった。それがやけに目についた。最後は」

最後の剣にも模様がかった。今度のそれは細い雲のそれに似ていた。

## 第五章

「どの剣も見事な冴えです。どれにされますか？」

「それでは私は」

最後の剣を手を取った。そのうえで言うのだった。

「これを頂きます」

「その剣ですか」

「はい。この剣に名前はありますか？」

「いえ」

伍子胥はその言葉に首を横に振った。

「まだありませんが」

「左様ですか。それでは」

その言葉を受けて言う。

「これからの私の働きによって名前が決まるのですね」

「そうなります」

こう専緒に告げた。

「全ては貴方次第であります」

「そうですね。それならば私に相応しい」

専緒はそれを聞いてうつすらと笑った。剣の中に血を見る笑いで

はなかつた。達観して全ての覚悟を決めた澄み切った笑みであった。

「では」

「はい、御願います」

「是非共」

光と伍子胥は再び専緒に対して深々と頭を垂れる。こうして彼の仕事は決まった。その日はすぐに訪れたのであった。

王は光の屋敷に来て出陣を願った。光はそれを快く受けて宴を開くことになった。だがここで王の腹心達が自らの王に対して囁くのであった。

「王よ、御気をつけ下さい」

「お気付きだと思いますが」

「わかつておる」

王もまたわかつていた。険しい顔でその腹心達に対して頷くのだ。  
つた。

「公子のことだな」

「左様です」

「おそらく公子は」

「王の座を狙っている」

王はそのことをはつきりと言った。既に彼も勘付いていたのだ。

「それは間違いないな」

「ですからここは」

「策があるのか」

「はい」

腹心の一人が王に対して深々と頭を垂れて述べた。

「兵を連れて行きましょう」

「兵をか」

「それも王宮から公子の屋敷まで並べるのです」

光は公子だ。その地位の高さは言うまでもない。屋敷も王宮から  
すぐそこにあつた。その為兵を並べていくことも可能であるのだ。

「そうすれば公子とて何もできないでしょう」

「わかつた。ではそうしよう」

腹心のその言葉に頷いた。

「すぐに兵を置け。よいな」

「はっ」

こうして王は宴に出ることにした。すぐに兵が並べられ王宮から  
光の屋敷まで物々しく武装した兵士達が立ち並んだ。それだけで唯  
の宴ではないことがわかる剣呑な雰囲気となっていた。

光はそれを見て動じた。王が気付いたことを悟つたのだ。

「まずいな」

「いえ、我が君」

伍子胥はうるたえる彼に対して言うのだった。

「御安心下さい。そうであっても何ら問題はありません」

「そうなのか？」

「予想されたことです」

平然とそう言うてのけるのだった。

「この程度のこととは」

「しかしだ」

光は言う。不安に満ちた顔で。

「実際に今こうして兵が」

「こちらにも兵を用意します」

伍子胥はまずはこう述べてきた。

「こちらもか」

「兵には兵を」

彼はこう主に告げる。

「それで向こうはまずは一つ手を失います」

「うづむ」

「そして」

そのうえでまた言うのだった。

「こちらにはさらに手を打ちます」

「専緒殿だな」

「そうですね。我々も宴に出て安心させ」

「そして。だな」

「それで宜しいでしょうか」

「ここまで述べたうえで主に対して問うた。」

「そこまですたうえで」

「わかった。ではそれで行こう」

光もそこまで聞いて頷いた。伍子胥をここでも信頼したのである。

「頼むぞ」

「お任せ下さい」

こうして光も伍子胥の策に従い備えをした。こうして一触即発の

状態で宴がはじまった。王も光も伍子胥も王の腹心達もそこに姿を現わし表面上は平和に宴がはじまった。

## 第六章

宴において表面上重要な援軍の話自体はすんなりと決まった。光は出陣の要請に頷いたのである。

「お任せ下さい」

表面上は忠臣として王の申し出を受けた。

「必ずや陛下の心を安んじさせて頂きます」

「うむ、頼むぞ」

王もまた彼の言葉を信頼する家臣として受けた。双方共剣呑なものをその心に隠して。

「ではな」

「はい。ところで」

「どうした？」

ここで光は急に様子を変えてきたのだ。王と腹心達の心に警戒の雷が走る。

「廁へ」

光はそう答えた。

「暫く席を外します。宜しいでしょうか」

「うむ」

王は警戒しながらもそれを許した。怪しいとわかっているても。

「では行つて来るがいい」

「有り難き幸せ。それでは」

「我が君」

ここで伍子胥も名乗り出てきた。

「私も御一緒させて頂いて宜しいでしょうか」

「そなたもか」

「はい。宜しければ」

王と腹心達はそれを見て警戒の念を強める。いよいよ不穏な空気になってきていた。

「そうだな」

今の光の言葉が決定的であった。

「それでは一緒にな」

「有り難き幸せ」

「では王よ」

光は何気なくを装って王に顔を向けてきた。

「暫し失礼致します」

「うむ」

王は緊張を押し殺して応える。だがそれは最早気となって露わになつていた。腹心達も兵士達もそれは同じであった。殺気が場に満ちていた。

「ではな」

「はい。それでは」

「これで」

光も伍子胥も席を立った。これで場の緊張は頂点に達した。

「王よ」

その腹心の一人が王の側に来て囁いた。

「御気をつけを」

「わかつている」

王もその言葉に頷く。最早彼等の中ではこれから何が起るのか明白であった。

「いよいよだな」

「来ますぞ」

「問題はどうか来るかだ」

王は小声で言う。

「毒というのも考えられるが」

「ちらりと料理を見る。」

「それはどうか」

「確かにそれもあります」

それについては腹心達も懸念していた。だがそれはすぐに打ち消

された。

「ですがそれは」

「公子も同じ皿のものを食べていました」

これでその可能性は消えていたのだ。これは古来より中国にある毒殺の防止法であり大きな皿にあえて入れてそこにあるものを一緒に食べるというものだ。こうすれば向こうも毒殺はできない。所謂知恵である。

「それはないかと」

「では。やはり」

「刺客ですな」

「私もそれを警戒しています」

別の腹心も言ってきた。

「やるならば」

「それしかないです」

「そうだな。だがそれは」

ここで王は言った。

「この兵士達が守ってくれる」

「はい」

「ですからそれも。しかし」

それでもだ。警戒を解くわけにはいかなかったのだ。

「公子と伍子胥殿です。何をしてくるか」

「わかったものではありません」

「その通りだ。むっ」

ここで場に誰かが入って来た。すぐに兵士達が彼を呼び止める。

「誰だっ」

「止まれっ」

「料理人でございます」

その者は自分呼び止めた兵士達に対してこう述べるのだった。

見れば確かにただの料理人だった。その手には皿がある。ただ、やけに手の長い料理人であった。

「料理をお持ち致しましたので」

「料理だと」

「はい」

また兵士達に応えた。

「これでございます」

「魚か」

見れば皿の上には魚が置かれていた。鯉である。

「はい、焼き魚です」

料理人はそう答えた。

「只今お持ち致しました」

「それは公子からのものか」

「左様です」

そう述べる。

「王と共に頂きたいとのことですので」

「ううむ」

「王よ」

そこまで聞いた兵士の一人が王に顔を向けて問うた。

「どうされますか？」

「焼き魚のことですか」

「ふむ」

王は兵士達に問われて考える顔になった。顰めさせて顎に手を当てている。

「見たところ何も」

「おかしなところはありませんな」

「そうじゃな」

腹心達の言葉に頷く。

「これは問題ないか」

「はい」

「武器になりそうなものは何も」

そうとしか見えなかった。料理人が持っているのは皿、そして皿

の上にある魚だけである。とても他に何か持っているようには見えなかった。

「ではよい」

王はそこまで見て遂に決断を下した。

## 第七章

「持って参れ」

「わかりました。それでは」

料理人は王の言葉に頷いた。そうして兵士達に通され部屋に入った。ここで兵士の一人がふと彼に問うことがあった。

「待て」

「何か」

表情を変えずにその兵士に顔を向ける料理人であった。

「その魚の上にあるものは何だ。花か」

「はい、花です」

兵士の問いに静かに答えた。見れば青い花が一輪魚の上に添えられていたのだった。

「花か。青いが」

「菖蒲です」

彼はこう答えた。

「魚に花を添えると味がよくなりますので」

「そうなのか？」

「私が見つめました」

にこりと笑って述べるのだった。

「全く違う味になります。ですからそれを王と公子にと思いまして」

「菖蒲か」

王もその話を聞いていた。菖蒲と聞いて表情が少し変わった。

「ならばよい」

「宜しいですね」

「わしも菖蒲は好きだ」

これは本当のことだった。だから少し警戒が解けた。それが間違いであったが。

「偶然かな、これは」

菖蒲

「いえ、違います」

料理人はそう答えた。

「これもまた公子から王への贈り物でございます」

「公子からの」

「はい」

料理人は静かに答えた。

「王への。王がお好きだということ」

「そうか。それはよいことじゃ」

微かだが顔を綻ばせた。

「それではな。その菖蒲を早く見たい」

「それでは」

兵士達の前を通り過ぎてそのまま前に進む。ここで王はまた問うたのであった。

「然るにだ」

「何か」

料理人はまた王に応えた。

「その菖蒲はわしへの贈り物だったな、公子からの」

「左様です」

皿を掲げて頭を垂れる。

「お受け頂けるでしょうか」

「無論」

王は警戒をかなり解いていた。そのうえでの返答であった。

「喜んでな」

「それを聞いて安心しました」

料理人の顔が綻んだように見えた。王はそれを見てさらに安心した。しかし気付いてはいなかった。その目は決して笑っていないかったことに。

「これで」

「これで？」

「私も任を果たせます」

「任だと!？」

「はい」

ここで料理人の声が変わった。

「私の任、それは」

「王よ」

腹心の一人が咄嗟に声をあげる。だがそれは間に合わなかった。

「これにございます」

料理人はやにわに魚の皿に右手を突っ込んだ。何とそこから剣を出してきた。小振りだが実に形のいい独特の剣だった。

「剣!」

「そこに隠していたのか!」

「王よ!」

腹心達は慌てて王に駆け寄り下さす。当然彼を守る為だ。

「ここはお下がりで下さい!」

「早く!」

「う、うむ!」

王はそれに頷く。だが料理人の方が動きが速かった。それもかなりだ。それを止めようにも彼の動きは兵士達よりもまだ速かった。

兵士達が矛を手に突き進む。彼はそれよりも早く剣を構え皿を上に向けていた。魚も菖蒲も高々と投げられそこから落ちる。まずは魚が落ちた。花は空に揺られて少し遅れていた。

腹心達が王を守るよりも、兵士達が矛を彼に突き立てるよりも彼の動きは速かった。その料理人、専緒の動きは。

剣を横手に投げる。今放たれた。丁度その前に菖蒲がありそれが王の視界を防いでいた。

「菖蒲………」

王はその菖蒲を見た。そうしてそれを見て悟った。光が何故菖蒲を彼に贈ったのかを。それは死への饞別に他ならなかったのだ。

菖蒲が切れた。散り散りに。そこから剣が来る。専緒が放った剣が。王が避ける間もなく剣は飛び、そうして彼の額を深々と貫いた

のであった。

冠が割れ床に落ちる。それを共に王の身体はゆっくりと後ろに倒れるのだった。

「王よ！」

「王！」

それを見て腹心達も兵士達も叫ぶ。だがもう間に合わなかった。剣は王を倒してしまっていたのだ。

専緒はそのまま宴の場の真ん中に立っている。身動き一つしない。その彼のところに兵士達の矛がそのまま突き進んできた。

避けられただろうか。それとも無理だったであろうか。どちらにしろ彼は動かなかった。動こうとはしなかった。身動き一つしようにしなかったのだ。

## 第八章

無数の矛に貫かれた。腹も胸も背も忽ちのうちに貫かれていく。針鼠の様になり血を噴き出す。彼はその中で静かな顔をしていたのだった。

「苦しくないのか」

「この様な目に遭ってもなお」

「確かに苦しい」

自分を貫いた兵士達にそう言葉を返す。

「私は死ぬ。これで」

「ではどうして」

「そこまで安らかな顔なのだ」

「果たしたからだ」

微笑んだ。そうして言うのだった。

「私のやるべきことを。だから」

「やるべきこと!?!」

「そうだ」

そう兵士達に告げた。

「これで。果たした」

王の亡骸を見る。その額にはあの剣が深々と突き刺さっている。

それが彼が責を果たした何よりの証拠であった。それを見ても満足した。

そのうえで今度は菖蒲を見る。菖蒲は切れてしまい足元に散らばっているだけである。だがそれでもなお美しくそこに青い花を見せていたのだ。

「青い花は。そこにある」

「菖蒲か」

「私が頂いたもの」

菖蒲を見下ろして言う。

「それは切れたが。咲いている」

「何を言っているのだ？」

「切れただけの咲いているだの。何のことなのだ」

「わからなくていい」

いぶかしむ兵士達に対して告げた。

「独り言なのだから。では」

血を吐いた。顔が見る見るうちに蒼白になっていく。死が近いのは誰の目から見ても明らかであった。彼は今死のうとしていたのだ。  
つた。

「さらばだ。これで」

ガクリと頭を垂れた。それで終わりだった。

「死んだのか」

「はい」

王の腹心の言葉に兵士の一人が答える。

「今。息を引き取りました」

「そうか。やはりな」

専緒を見て言う。

「死んだか。刺客ながら」

「見事です」

それは誰もが認めることであった。だからこそ今彼等は静かになつていたのである。

「ここまで果たすとは」

「名は何というのか」

「専緒だ」

ここで誰かが名を告げた。

「それがこの者の名だ」

「覚えておくがいい」

もう一人の声が出た。そこには彼等がいた。

「公子。伍子胥殿」

「やはり貴方達が」

「そつだ」

「我々が命じた」

二人はゆつくりと部屋の中央にやって来てそれを告げる。今その前に責を果たした専緒の亡骸が矛から解放されてゆつくりと横たえられた。その亡骸は血に濡れていても安らかな顔をそこに見せていたのであつた。何も悔いはない顔を。

「彼はそれを果たした」

「それは忘れないでくれ」

「はい」

皆それに頷く。例え自身の主を殺した刺客であつても。その心は受け取つていたから。

「覚えておきましょう」

「彼のことを」

「専緒」

光は彼に顔を向ける。そうして声をかけた。返事がないのがわかつていても。

「よくやってくれた」

「済まぬ」

伍子胥は彼に謝つた。深い言葉で。

「こつなることはわかつていた。だが」

「我々はそなたを使った。そのことは」

しかし返事はない。何処までも。それは変わりはない。だがそれでも彼等は謝罪するのであつた。そこに心があるのがわかつているからこそ。

「何時までも伝わる。そして」

「貴殿のことも」

今度は伍子胥が言う。

「一人の男がいたとな」

「永遠にな」

「そうです、永遠に」

そこにいた一人の老人が立ち上がって述べた。彼は王宮の記録係であった。

「この者の名は残りましょう」

「また名前を言っておこう」

光は専緒の名を彼にも告げることにした。どうしても残しておきたかったからだ。

「彼の名は専緒だ」

「専緒殿ですな。それでは」

「書き残しておくがいい」

「こつも告げた。」

「我等が何をしたのかもな」

「よいのですか、それで」

それならば彼等が王を殺したことが歴史に残る。それを問うたのだ。かつて自身が王を殺したことを書かせない為に記録係を殺していった男が斉の国にいた。こうした者は往々にしてどの国にもどの時代にもいる。都合の悪いことは誰も書き残されたくはないものだ。だから歴史書には様々なオブラートもあつたりする。だがここれ彼等はあえてそれをよしと言ったのである。

「そのようにして」

「そうでなければ彼が何を為したのかは残らぬ」

光はこつ記録係に述べた。

## 第九章

「ならば。よいことだ」

「私もだ」

伍子胥も言った。

「元よりそれは承知のこと。包み隠さず書くがいい」

「わかりました。それでは」

「そしてだ」

伍子胥はなおも歴史係に言う。

「はい」

「彼の名も書いておくようにな」

「それではそちらも」

「専緒よ」

伍子胥は彼に顔を向けて声をかけた。

「そなたの名は残る。永遠にな」

専緒は何も語りはしない。だがその顔は安らかであった。その安らかな顔でそこに静かに眠っていたのであった。ことを果たした顔で。

専緒は死に光が王となった。それからの呉は伍子胥と孫武の下大  
幅に力を蓄え遂には楚を脅かし散々に打ち破った。伍子胥は楚の都  
を攻略するとすぐに自身の父と兄を殺したあの王の墓を暴いたので  
あった。全ては復讐の為であった。

「遺体をどうされるのですか？」

「決まっている」

豪華な服に包まれ骨だけになっている亡骸を憎悪に満ちた目で見  
下ろしていた。

「罰するのだ」

「ですがもう死んでいますか」

「そうです」

側にいる兵士達が伍子胥に対して言う。

「これでは何もできません」

「都は攻略しましたしこれで」

「ならん！」

だが伍子胥はこれで終わらせるつもりはなかった。激しい声で言うのだった。

「まだ我が怨みは消えてはいない。父と兄を殺された怨みは！」

「ではどうされるのですか？」

「墓はあばきましたし」

死者に対する最大の辱めである。これで充分ではないかと誰もが思った。だが伍子胥はそれに満足してはいなかった。まだ復讐を果たすつもりだったのだ。

「鞭を持って」

彼は兵士達に言った。

「えっ」

「鞭を持ってと言ったのだ」

また言う。そうして強引に鞭を持って来させ己の手に持った。

それから。王の遺体をその鞭で打ちすえだした。それも幾度も幾度も。怨みと憎しみを込めてただひたすら打ちすえるのであった。

「死んでも罪が消えると思うな！」

彼は王の遺体を痛めつけながら叫んだ。

「貴様の罪は消えはしない。永遠に刻み付けてくれる！」

「あ、あの將軍」

「幾ら何でもそれは」

「黙っておれと言っている！」

止めようとする兵士達に対して叫ぶ。

「ずっとこうするつもりだった。この王をこの手で」

まだひたすら打ちすえる。身体はバラバラになり砕けていく。やがてそこにあるのはただの残骸だけとなった。だが髑髏だけは残っていた。

「その辺りに捨てておけ」

棺まで完全に壊して控えている兵士達に告げた。

「そして首は」

「首は？」

「わしが捨ててくる」

鞭に突き刺して言った。その髑髏を。

「江にでもな」

長江のことだ。呉も楚も南方にあり河といえは長江のことを言うのだ。

「そうして。あの世でも永遠に安眠できぬようにしてやる」

「永遠にですか」

「そうだ」

相変わらずその顔は憎悪に燃えていた。その顔で笑みを浮かべていた。見ればそれは凄みのある笑みであった。悪鬼の様な。

「永遠にな。愚かな罪の劫罰を与えてくれる」

「わかりました」

「では」

「墓も完全に壊してしまえ」

去り際に兵士達にこう告げた。

「わかったな」

「はい……」

兵士達はうなだれてそれに頷いた。彼等にしてみれば最早伍子胥の行いは人のそれではなかった。だが彼にとつては当然のことであったのだ。

彼は江に行き本当に首を放り込んだ。髑髏は忽ちのうちの流れの中に消え去ってしまったのであった。

こうして楚王は死しても罰を受けた。伍子胥はそれは済んでからようやく落ち着きを取り戻して川辺を眺めたのであった。するとそこには。

菖蒲

菖蒲があった。川辺に咲き誇っている。その花を見やる。

「菖蒲か」

見ていると彼のことを思い出した。専緒のことを。

「思えば貴殿のおかげだな」

菖蒲に対して声をかける。専緒に重ねて。

「貴殿のおかげで我が君は王になることができ。そして」

自らも復讐を果たせた。そのことを想っていたのだ。

「全ては貴殿のおかげだ。何もかも」

礼を言う。今その有り難さで心が満ちていた。

「そして。済まぬ」

次に謝罪した。

「貴殿の様な者を死なせて。何と言えはいいかわからぬ」

だが礼を述べたのだった。それでも。

「だからこそ。安らかに眠れ。家族のことは気にせずにな」

そこまで言って完全に沈黙した。そうして菖蒲を見続けた。

史記等多くの本に専緒の名は残っている。彼が暗殺の時に使った剣は魚腸という名になり後世に伝えられた。だが彼が菖蒲を贈られたことにより運命が決したことと最期に菖蒲に彩られたことは知られていない。だが今も菖蒲は咲き誇っている。専緒の様に静かに。そして美しく咲いている。

菖蒲 完

2007・9・30

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1591d/>

---

菖蒲

2009年3月24日09時22分発行